財團法人 斯文會

150518

史學雜誌第二十五編第二號 (通卷第二百九十一號)
大正三年二月二十日發行

論說

近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響(第一回)

(近世支那を背景としたる日本文化史)

文學士 中村久四郎

目次大要

第一章 緒論
一、本篇の趣旨……二、本邦と支那の文物的關係……三、本邦人の支那觀特に清朝時代に關する概說
第二章 近世支那と本邦の學術及び政治
一、儒學……二、史學……三、文學……四、文字言語學……五、美術……六、宗教……七、醫術及び博

物學……八、漢籍より得たる西洋の新知識……九、政治……十、(附錄)本邦學術の彼國に及ぼしたる勢力影響
第三章　近世支那と本邦の物產
一、動物界……二、植物界……三、鑛物界……四、織物唐絲其他の工藝雜貨
第四章　近世支那と本邦の風俗習慣及び武藝
一、衣……二、食……三、住……四、拳法
第五章　餘論

第一章　緒論

第一節　本篇の趣旨

人の一生は、棺を蓋ふて後、その眞價始めて定るといふ。約三百年間、異族を以て漢民族の支那に君臨し、漢・滿・蒙・回・藏の五民族を打つて一團とせる大帝國を支配し、一時は世界の强國として西洋人にも驚異嘆稱せられたる清朝も、既に二年前に滅亡して、今や蓋棺の後ともいふべし。されば此清朝の價値を評し、功過を論じ、その總勘定をなし、決算を試むるは、亦歷史家の一任務なり。特に我日本より觀たる清朝存立の價値を論ずる事は、我等日本人として興味あり、又有益なるべき一問題なり。

すべて歷史上の人の價値を定めんと欲せば、先づ若しその人世に出でざりしならば、歷史は如何に成り行くならんかと想ひ、或は其人の當時に於ける勢力、または後世に及ぼせる感化影響の程度如何ならんかと考ふるを以て、最も要領を得、かつ肯綮に中るものとすべし。今清朝の價値を評定するにも、大體此方針により、特に清朝文物の本邦に及ぼしたる關係影響を主として論せんとす。されば本篇は清朝の文物其ものを研究するよりも、寧ろその我國に於ける感化影響の狀態を觀察せんとするものなり。

また凡て歷史上の事實は、連綿繼續して絕えず。社會の事實は必ず終始因果の關繫連絡あり。之を分割して其間に截然たる區劃をなすは、元來不自然なり。兩朝興亡の際の如きも、前朝の終と後朝の始とは、其時代頗る長く混同し、新朝の文物は舊朝の文化を繼承せるものなれば、今清朝の初より說き起さんと欲せば、自然明朝の晚年に論及せざる可からず。斯く述べ來れば、本篇は清朝存立の總勘定の一面たり、又決算表の一部たるとゝもに、明末清初以來の支那文化の我日本に傳來影響したる歷史とも看做すべし。題して近世支那の日本文化に及ぼしたる勢力影響、或は近世支那を背景としたる日本文化史といふは、卽ち之が爲なり。若し夫れ

清朝文物の西洋に及ぼしたる關係影響に至りては、別に稿を更めて論ずることとせん。

第二節　本邦と支那の文物的關係

「玉葉和歌集」卷十八雜歌五の前參議爲相の歌にいはく、

これのみぞ人の國より傳はらで神代をうけし玄きしまの道

我神代の大昔より傳はれる敷島の道と、神典の日本的大精神は、實に我國の獨特固有の大道たり。決して人の國より傳はりしものにあらざるなり。

然れども、敷島の大道以外の文物につきては、人の國より之を傳へ、之を學びたるもの少からず。明治以後は、今姑く之を措きて論せず。明治以前に在りても、我邦の文化は、大陸の外國文化の傳來によつて、豐富となり、複雜となり、隆盛となり、變化し、發展し、外國の文化を背景とし、之を採用同化して、以て現代に至りし事は、今更にいふまでもなき事實なり。而して我國が支那より受けたる文化を達觀するに、時代によりて、各、特色あり。而して外來文化は、概して其時代の新しきものたり。先づ精神的思想上の方面より觀るに、

第一、漢學は、醍神天皇時代の新學となり、

第二、佛教は、欽明天皇時代の新思想となり、

第三、禪は、鎌倉時代の新宗教となり、

第四、宋學は、後醍醐天皇時代の新說となり、

第五、陸王の學、特に陽明の學は、德川時代初期の新聲となり、

しかも、是等の漢學、佛教、禪、宋學及び陽明學は、皆支那より傳來したるものなり。

次に美術工藝の方面より觀れば、

第一、六朝藝術は、推古時代に、

第二、唐の藝術は、天平式の時代に、

第三、宋の藝術は、鎌倉時代に、

第四、明の藝術は、足利時代と桃山時代に、

それ〳〵支那より我國に傳來して、各、其時代の新意匠となり、新しき刺激となり、新しき奬勵となりて、以て日本藝術の發展を助けたり。

我國が支那より受けたる文化の勢力影響は、清朝以前にありても、多く且つ大なること斯の如し。清朝時代の支那より受けたる精神的及び物質上の文化の感化及び影響果して如何程なりや。是れ本篇に述べて大方の教を仰がんとする所なり。

第三節　本邦人の支那觀特に清朝時代に關する概說

或は採長補短と稱し、或は順應同化と呼び、或は攝取吸收といふ。字は異なるも、義は大同にして、古來我國は外國の文化を採用して、巧妙に之を同化して、以て固有の美點を進化發展せしむる資料となすに長じ、しかも國體和魂の精華を保ちたり。然れども、殆んど極端に外國の文化を尊び、外尊內卑の弊に陷りしことなきにしも あらず。和製品を劣として、舶來品を優とするは、決して現代の日用貨物のみにあらず。自國の製品よりも外國輸入品を重んずるは、決して今日の工藝機械のみにあらず。隋唐の文物に殆んど心醉せし當時の人の支那を尊びし事は、我國史上に顯著なる事實なり。行基菩薩が自ら東夷人と稱したる、日蓮書等に本邦を呼びて粟散邊土といへるなども、亦外尊內卑の實例にして、徂徠が東夷人と稱せし以前にも、同樣の他尊自卑の例に乏しからざるなり。

實に我國人は、善く評すれば、虛懷求益といふべく、また採長補短と稱すべきも、惡しく言へば、外國文化に心醉し、之を過重する傾向あり。清朝時代の支那に對したる德川時代の本邦人の態度は、果して如何なりしか。

德川時代も、三代家光以後は、所謂鎖國の狀態にあり。然れども、其鎖國は寧ろ一般の西洋諸國に對したる事にして、支那には開國の狀あり。清蘭二國は同じく長

崎貿易を許可せられたる唯二ッの外國なるが、清國は華といひて尊び、和蘭は夷とよびて卑むといふ感情は、當時普通の思想たり。卽ち支那は別格の外國として尊び、和蘭等は通常の外蕃として、卑みたるを常として、清國に關しては華人、華學、華館、華船などといふに對して、和蘭につきては、蠻人、蕃書、蠻館、蠻船などと呼びたり。

支那を大國または上國として尊びし事は、本邦人古來の習慣にして、獨り德川時代に限りし事にはあらざれども、德川時代は、實に支那尊重の尤も甚しき時代たりき。其理由は、古來より大陸文化の感化影響を受けて、習慣の久しき、遂に殆んど、國民性の一部分ともなりたる外國尊敬の念は、確に其一原因なるべく、又足利氏以後、約二百年、戰爭多くして泰平少かりし亂世に厭きて、干戈の響き、矢叫びの聲よりも、咿唔の聲、絃誦の響きを渴望するに至りしが、內地の文化久しく振はずして、其希望を充すこと能はず。是時に當りて清朝は支那を統一し、特にその康熙乾隆時代は、その國運文武共に盛にして、歷朝に優りて見えしこと、林子平さへ、その「海國兵談」の序の中に、

今の清（カラ）は、古の唐山に優しゆる、……。必ず明迄の唐山と思ふことなかれ。云々。

と思ひし程なるを以て、內地に於て充すこと能はざる渴望は自ら外國に向ひ、古來

の祖先も久しく之を學びたる支那の文物を輸入採用するの最も安全便利なるを感じたる一種の精神的服從も、亦主なる原因なるべし。また人多くは雅を尊び俗を卑しみ、多きを輕んじ少きを重んじ、遠きを崇め近きを蔑にし、稀有を珍とし常有を凡とす。而して我の彼に於けるや、我が人と物は多く近く又常有にして、彼の人と物は少く遠く又稀有なれば、自ら彼國の人と物を尊崇珍重し、且つ當時も他の時代と同じく「顏氏家訓」(北齊の顏之推撰)に、

古今語無雅俗。唯世之罕道者似雅。語本無雅俗。只所常言者俗。

といふが如き狀態ありし事も、支那の文物を尊重したる一原因たりしなり。

かくて漢文漢詩の流行せし事、恰も西洋史の羅馬戰勝の日より第十七世紀に至るまでは甚だ盛に、今に至るも猶やまざる羅甸語の長久なる統御あるが如く、元來不變更たるべき固有名詞の姓名、地名、官名等に至るまで一として、支那風を模倣し て喜ばざるはなし。室町時代の禪僧と同じく支那の文學に執はれたるものといふべき一般の儒者にありては、此弊風尤も甚しく、有名なる儒者にして、其本姓を支那風に改稱せざりしものは、中江藤樹、山崎闇齋、伊藤仁齋及び太宰春臺等に過ぎず。道學を以て自任せし中村惕齋の如きも、複姓の村の字を削修して中氏とせり。(金峨先生匡正錄等參照)

元祿年中、荻生徂徠の「晉書」に句讀を施すや、荻生惣右衞門茂卿と稱して、儼然たる日本主義をあらはせり。流石は豪邁自尊、一世を籠蓋し、一代文學の巨擘たりし彼は奮然として一般の支那模倣の學者を覺醒せんとしたる意氣を感せしめたり。而るに後久しからずして一般の風潮に動かされ、本姓物部を以て、物と改稱し、物徂徠の名最も洽く行はれたり。或は猶これ可ならん。其門下の服部南郭の服子遷と稱する、安藤東野の滕東璧と稱する、平野金華の平子和と稱するに至りては、純然たる支那人の如し。

地名に至りても、京都を洛陽と稱する、或は猶これ不可なからんも、武藏を武昌または武陵と稱し、東海道を長安道と呼び、相摸川を湘水といひ、和泉を酒泉郡と稱し、目黑を驪山と名くるが如き、沒常識も亦甚しき支那模倣といふべし。

次に德川時代の儒者が清朝を尊びたる實例は、來舶の清人に詩文を乞ひ、書畫を請ひ、或は清の商舶に托し、彼國の人に詩を送りて和を乞ひ、たまたま之を得れば、非常の名譽として珍重せしもの少からず。一例を擧ぐれば、長崎の詩人高彝(渡邊暘谷、名は彝、本姓高階氏なるによつて、高彝または高暘谷と稱すること漢人の如し)の

如き、來舶清人の諛辭を信じて、自負の念を生じ、重く商舶に賂ひて、詩卷を清の沈德潛に贈り、書を通ぜんとして、清商の欺く所となり、後人の指笑を買ひしが如き陋態をなすものあり。〔先哲叢談後編卷五、柳橋詩話卷下、沈歸愚年譜等參照〕

無論例外はあれども、來舶清人の多數は、貨利を貪る商人にして、雅人高士の來ること少きにもかゝはらず、清人としいへば、賢愚雅俗の差別なくして、尊敬せしは、愚なりし事といふべし。

當時の儒林中、見識高邁にして、韓使應接の儀式に於て赫々の名を擧げたる新井白石すら、猶且つ清人の序文を得て喜べる色あり。〔是れは卽ち清の翰林編修鄭任鑰が「白石餘稿」に序文を作りしことにして、白石自身も「與安積澹泊書」(白石手簡の內)に於て滿足の意を表し、室鳩巢は「白石餘稿」に題し、高玄岱は其後に書する文を作りて、共に之を慶賀し、祇園南海は白石を哭する詩の中に之を特筆せり。(南海先生集卷三)〕

彼國を呼ぶ名稱につきても、大明、大清は其國人の自尊の侈稱か、支那の藩國又は屬國の支那を尊びて呼ぶ名稱なり。而るに、白石の「江關筆談」には、朝鮮の使者に對して、大明、大清と稱す。蓋し其常に言ふ所に慣れて、その自屈の非を覺らざりしなり。

また白石は、啻に漢人の序を得て喜びしのみならず、支那人の國民性に感服し、和漢民性の比較に於て、漢を優とし、和を劣とせる口吻さへあり。その「西洋紀聞」卷下に、西洋人が和漢兩國民を比較して、日本人は圓く、溫にして和なりといひ、支那人は方にして、固く澁れりといへる條の後に附言して曰く、

按ずるに、方圓の說、其試る所あるに似たり。漢人の如きは、其所謂堯舜以來、聖々相傳ふる道ありて、異端の言に至ては、老佛の微言も、なほ行はれ難き所あり。我國の如きは、古より此かた、佛氏の學盛にして、宗を立て、派を分ち、其徒おのおの我教を倡へ、天下の人彼に歸せざれば、此に入り、自ら異教を見て、怪しむことを知らず。かれを轉じてこれを移すに、其說行はれ易きこと、漢人の正を守りて、動かし難きが如くにあらざればなり。

と。白石すら猶且つ斯の如し。其他推して知るべし。

又本多利明は江戸の人、天明寬政の間、天文測量を講じ、又航海術を修め、特に北邊に注意して、北夷先生の號あり、また「西域物語」等を著せる活學新知識の學者なるが、つひに支那を尊べる時代精神の外に出づること能はずして、

此所政務第一の肝要なり。爰に開業の根本あり。則ち天文數理の道なり。

日本いまだ其業を精くせず。依て其趣意を知る者鮮し。支那にさへ、順治の末、康熙に到りて、歐羅巴人數輩來てより、法を得て、其道の粗を知れり。(經世秘策補遺)

といへり。「支那にさへ」の一語、我國よりも支那を重く視たる意をあらはせるものといふべし。

又當時清朝尊敬の一例としては、清の康熙乾隆二帝が大に本邦人に尊ばれし事あり。特に康熙帝に對する尊敬は著しくして、其言行は本邦識者の注意を惹き、康熙帝の

日月燈。江海油。風雷皷枝。天地間一番戲場。堯舜旦。文武末。莽操丑淨。
古今來許多脚色。

といふ對聯の如きは、弘く本邦人に傳はり、最上至高の格言とまで感服するものあり。例へば、江戸の儒者東龜年の「籃田文集二稿卷一の心賦の一節にいはく、

上國有聖人。德踰乎往號。澤溢乎八荒。嘗製儷語。日月燈。江海油。風雷皷枝。天地大。一番戲場。臣竊觀之。至矣高矣。不可以尚焉。

と。此上の頌讃はなし。感服も亦極れりといふべし。而して康熙帝の崩ずるや。

非常の事變と見て、直に左記の一書の出版さへあり。

康熙帝遺詔附新帝登極詔　岡島冠山謹句讀　享保八年刊

享保八年は、新帝卽ち雍正帝の元年なり。又康熙帝の上諭十六條は頗る有名なるものなるが、「聖諭廣訓」として本邦に傳はり、天明八年には、中井竹山の序文を以て、雍正帝の敷衍解釋せる文を添えたるものを出版して、「實に萬世不易の金言なり。」と稱賛し、其和刻本の末の豫告によれば、

聖諭廣訓國字解全三册　聖諭廣訓大意平かな　全二册

追刊の事さへあり。雍正帝も亦「希世の仁君」としての噂高く(「翁草」卷五十六等に見え)、乾隆帝の一代も「希代の盛事」として賛美せられ(橘南谿の「北窓瑣談」坤卷等參照)、その「樂善堂文集」は弘く讀まれ、集中の「治天下在得人論」の一文の如きは、人の注意をひき、特に之を表出して以て觀省に備ふる者さへあり。(介壽筆叢史籍集覽纂錄第四十七參照)。

右の外、德川時代の人が、交通の不便を顧みず、遠路長崎に至りて、商賣人風情の來舶清人と面唔筆談するを以て、今日の洋行以上の名譽となせしが如き實例は、枚擧に遑あらず。長崎にゆくことを得ざるものにして、たま〳〵東海方面に漂着せる清人に應接することを得れば、希代の珍事、一世の名譽として喜び且つ誇りたり。

上に述べたる東龜年の如きも其一人にして、安永九年五月、南京の商船房州に漂着するや、同志とゝもに房州にゆき、筆談終日、華夏の人にあへりとて、大に喜びて、文を作り、「眞千載一遇」と稱し、「不佞喜而後可知也」といふに至れり。〔藍田文集初稿卷六の游房筆語序の文參照〕

通商貿易上、清國に對して特別親密の關係ある長崎奉行の態度に至りては、八代將軍吉宗公にも、

わきて長崎の奉行など、あしく心得れば、唐をのみ尊く思ひあやまることあり。すべて書を讀人おほくは唐を好み、やゝもすれば國體を失ふ事出來るものぞ

と宣ふ。〔德川實紀有德院殿御實紀附錄卷二十〕

の言ありしが如き傾向あり。又德川時代、長崎に於ては、蕃椒を胡椒と呼びて、「とうがらし」といはず。是れ「唐を枯し」といふと同音なれば、長崎の地役人共、支那貿易の爲に生を營み扶助せらるゝ狀あるを以て、支那を尊敬する意味によりて、斯の如しとは、嘉永時代の長崎奉行、內藤忠明の「內安錄」に記す所なり。

又天明時代の讃岐の學者、森長見は「國學忘貝」を著はし、其中に記して曰く、

一醫厚く交る。此者詩文に泥み、專ら西土を讃す。予云ふ、其方頭は剃髮して、天竺釋徒なり。心は唐土を慕ふて、此國あることを思はず。されど衣服は此風俗なれば、誠に以て三國兼備せりと云ひて、共に一笑す。

と。此一場の笑話に類して、更に滑稽にして笑ふ可きは、伊勢貞丈の「幼學問答」（天明元年著）に見ゆる、ある儒者もと日本橋に住せしが「品川に宿替して、中華へ一里近くなれりと云て悅びし」といふ話なり。

佛敎信心の善男善女の東國奧羽地方に住むものは、西國九州地方の人を見て、西國は東國より印度卽ち天竺の彌陀の淨土に二三百里も近しとて、之を羨みしといふ話の如く、當時の儒者中、朝鮮は大陸に接壤して、最も所謂中華文明の支那に近しとて、朝鮮人を羨望したる者さへあり。明和時代の攝津の儒者服部仲英（南郭の義子）は、其友人菅習之が朝鮮の使節を三河の赤坂に接待せんが爲に、鳥羽侯に隨行せるを送る序文を作りて、

異邦於我。朝鮮最近。中略。或有彼接境壤界於聖人之國。服色制度異我。豈徒哉。意其中必有魁偉非常人。君子之至於斯。吾未嘗不得見也。卑辭通刺。敬之如師。塤篪倡酬。冀一言稱譽。以爲終身榮者。何異兒童目衣冠端拱人。概爲菅相。東都老媼云。西行百里。稍近佛土。是亦其比也。〔踏海集遺卷下〕

といひしが如きは、當時朝鮮人の重んぜられたるは、その固有の文化を以ての故にあらずして、支那に接近して、頗るよく支那の面影を傳へたるものとして、尊ばれたるものたりしことを知るべし。即ち所謂小中華として尊ばれたるものなれば、朝鮮人を推重せしは、即ち支那尊重の義となるなり。

之を要するに、德川時代の人は清人を尊重せしこと、現代の西洋人に對すると同等或は以上にして、卑屈遜讓も亦甚しきものあり。故に貝原益軒の如きは、之を慨みて、其本艸附言にいふ、本邦人は華人韓人を見ること甚だ高し。その口舌を聞て過信し、往々その欺罔を受くること慨嘆すべきなり。華韓の士亦奬寵に遭ひ、その不學無識を羞ぢ、意に知らざるを以て知るこゝなし、その事を問ひ疑を質すに方て、妄對して忌憚することなし。その言何ぞ信ずべけんや。本邦人概ね謂らく華人韓人皆學識ありと。その說或は皂白を轉倒するも亦疑を措かず。是れ邦人の不明なりと。

益軒先生の篤實謙遜を以て、その言斯の如し。覇儒の稱ある梁田蛻巖は、和風を俗とし、支那風を雅とするを怪みて、

大抵文儒之癖。尙雅斥俗。甚者面目眉髮倭。而其心腸乃齊魯焉。燕趙焉。

沾々自喜。〔蛻巖集後篇卷五稱呼辨正叙〕

といひ、奇矯なる高野長英は、當時の儒者の餘りに支那なるを憤りて、左の如くいへり。

傳習の久しき、儒半は支那人にして、僧は既に印度人に似たり。〔鳥の鳴音〕

實に德川時代の本邦人の清國尊敬は、今日之を想像し難きほど盛なるものたりしなり。既に斯の如しとせば、其間に彼國文物の感化影響なくして已まんや。況んや清朝の末路は、强弩の末に似て、甚だ振はざりしといへども、一時は支那の近世三代(元・明・清)の中、最も隆盛を極め、諸文物の發達頗る見るべきものありしに於てをや。況んや外國文物の傳來につきて妨害と視られたる將軍家光時代の所謂鎖國も絶對の鎖國にあらず。寛永七年の禁書の令の如きも、あらゆる外國より舶來の書籍輸入を禁ぜしにあらず。且つ吉宗の時に至りては、禁書の令を弛め、邪法教化を記せざるものは御構無之旨令せられ(享保五年)、輸入購讀大に寛となりて、醫藥及び諸科學に關する舶來書籍益、我國に入りし事情は、禁書の令と聯想せらるゝ秦の始皇帝の燒書の令にも、醫藥卜筮種樹の書を除外例とせし事と相類し、決して根本的に排外の精神あらざりしに於てをや。

況んや尚又德川氏時代の所謂鎖國も、之を厲行するに力めたりしは、大體寛永より元文に至るまでの一百年間（大體家光より吉宗に至るまで）にして、それより後嘉永に至るまでの一百年間（大體吉宗より家慶に至るまで）は、鎖國不厲行の時代、言ひ換ふれば、開國準備時代にして、徐々にして且つ少量ながらも、當時一般の人が外蠻として卑みたる西洋の文物新學をさへ輸入したる時代なれば、所謂中華の上國として尊びたる清朝文物の傳來影響の多くして且つ大なりしこと怪むに足らざる事情なるに於てをや。

本邦人殊に文人の清人を尊重せしは、德川時代のみならず。明治時代に至りても、なほやまず。信夫恕軒曰く、

今の文人、清國辮髮奴を懼るゝこと虎の如く、之を尊むこと孔孟の如し。一たび彼が諛評を獲るときは、自ら以て韓柳と爲し、歐蘇と爲す。笑ふべきの甚しきなり。〔恕軒漫筆卷上明治二十五年刊〕

と。恕軒平生の氣焰甚だ高く、筆端往々怒氣をあらはすといへども、右の文の如きは、決して怒罵のみの言にあらざるなり。

尚詳しくは之を後の章に說くことゝして、概說を終らん。

〔附言〕德川時代の人なりとて、すべて清國を尊重せしにはあらず。國學者中最も支那を好まざる平田篤胤は勿論、國學者は常に我を尊びて彼を卑しめ、儒者の中にも、清國を貶して韃虜といひ、清人を罵りて辮子などと呼ぶものあり。右の一節に於て此等の事に言ひ及ばざりしは、本篇の趣旨なる清國文物の傳來影響の原因は、いふまでもなく此にあらずして彼にあるを以てなり。

第二章　近世支那と本邦の學術及び政治

第一節　儒學特に考證學風

我日本が近世支那より受けたる影響の中、尤も大なるは、學術に關する事にして、其中儒學或は漢學に關する影響最も大なり。

一概に支那の學術といふも、時代によりて各特色あり。儒學創始の先秦時代の後、兩漢の記誦訓詁に精しき、六朝の清談詞章を競へる、唐の詩文の前後に優れたる、宋の性理學風の新なる、各、其特色を發揮せるものなり。而して明末清初以後の近世支那に至りては、編纂と考據の博且つ精にして、特に考據又は考證學の盛なるを以て其特色とすべし。

次に近世日本卽ち德川時代の學風を見るに、慶長元和以後の第一期七十年許は、儒林多士なりと雖ども、概ね程朱或は陸王の說を信奉するに過ぎず。又當時の學